



芭蕉翁四季後句解 上下



芭蕉翁四季後句解

上下

朋

三

序

雜譜の名は古今ふまはり其旨といへども我門は
古人を以て者被しとて然る中又神祕を
務むハ能祖を世に傳はりて其旨を先づ
と傳はりてとやむとこれ故に何事か言分十子
その外法面に流りて多きれ故に其志を以
てれとも其旨は極極有りて人々其旨を其
とそりて其旨を傳へて其旨を其旨に其旨
この其旨を其旨に其旨を其旨に其旨に其旨
今其旨の旨を其旨に其旨を其旨に其旨に其旨

お封神用曲箭字眼玄妙乃法守く風流の本紙
其々、末にけしき只く世紙と云ふ名ありあそ
そのまもあつて多し類多しと云ふ雪中落
葉をば先所風流の正統史登起樹りて
別風流れ忘印と改序し一書乃本まじり
彼起樹り正風と云ふて芽登り一星露十と世紙
こそなるその年月訪ひし事好士れ其後と云ふ
あれ時よ法守く世紙と云ふは其後と云ふ
乃神の改記乃何の時を本風の史あり一揮の
まのしつゝいん果ぬるを改く一書乃の山

家の楯乃史と改れよめ改たりし人鳥はの
うし此後やく楯と云ふは其後と云ふは
為王此後と云ふは其後と云ふは
おとひりし又古き言事と云ふは其後と云ふは
むし改志のいあつて板橋の橋と云ふは其後と云ふは
女の唄と云ふは其後と云ふは其後と云ふは
かくやと想像し又古坂岩の歌ありと云ふは
中に古き言事と云ふは古戦場の事と云ふは
催し接人の史と云ふは其後と云ふは
あそと云ふは其後と云ふは其後と云ふは

翁乃生涯ハ西行家紙の如と云ふは喜は系
こころ此吟みされたるは實に花も睡よさら
まじいなるむ人のあやめやまじく時を
此夜の歌を紙に秋の月れあつらんは
折くんと時の飄乃いろく秋の歌くは
驚動を付文を此ゆりたるん時を
ついに乃よれ縁をえりてまき自を
うらめれ一息もむびりて志のこころ
民家のこころは幸甚哉といふれは
あつてこれあのかうにもあつた
あつてこれあのかうにもあつた

事して書り月めくして林麻七
あつてこれあのかうにもあつた
あつてこれあのかうにもあつた
あつてこれあのかうにもあつた
あつてこれあのかうにもあつた

奕曆七のこころ 糸月

楚水

芭蕉翁句解

吾年高矣述

芭蕉翁のまきとるや作持の初なる

芭蕉翁のまきに けまをいせふと人書信と使
うとくまき花林よりん世依ふよれりけあま字の帯此
人と元日と通つまは芭蕉翁と形家せられたる例の
風流のまきと林の極切らぬものうらけひもひあはす
世風の罪且よいせの初後とく 後ふ一字を捨つて
一字の減るるまきとる

年々や 穉くも 穉くも 穉の面

樹をたぐひて一極の面も 無くも 穉人の 穉の
うつり 穉くも 穉くも 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の

はくし 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の

穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の
穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の

穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の

大穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の 穉の

衣冠履靴の姿より只ひ合せられ或書に任表れ
杉を枕臥しつゝに書を誦す神は若くは後徳成御おの誦を
稱し汝の何よゆき凡旬有余比若くは白髪あるう禱を
帽の世を檀のあしるん床皮を松下の山麓のあしる禱を
をえしそ和琴弦ひきあしるん書に杉のあしる書信
かうする夕暮をとりん地をとりん只くあしるあしる
かゝりあしる

誰人か 蕪るくまに花のもろ

孫辰字元公家質識席為業明詩書為京兆

功曹冬月無被有藁一束暮卧朝收

似合しや 新年 孰れみみ

深川芭蕉庵よりみみみみみみみみみみみみみみみみみみ
その時門人皆又是よとるよのを深川に兼て稱を
瓢銘山素堂 一瓢重代焦山自笑 祢箕山莫慣
首陽餓 這中飯 顯山

この世の川孰れを 軽き我世の耶

是よ孰れの又何の略しや 在食何果の家の子

初より又或集りて 小ありて也新のゆきとて
 かね 年を月を日とて 東の神を告ぐる言
 るのありて

子良籠の後を梅のついで

清み良みよれしるる梅のそと

おりての古伝言の 此の良きなり
 右神宮の神饌と奉仕を為すありて
 居る事ありて成り良の籠よりんて神を
 梅の帯をぬきしるるありて

むかしは茶葉海りては茶のそと計

此の茶のし別大津より東の旅行あり梅茶葉の
 茶の白の色をとりて 此の風流をとりて
 此の茶の 又茶のけをとりて 此の茶の
 茶のけをとりて 此の茶の 一棒やんて
 けの之は也
 の交

ころもやんては茶のそと計

梅茶葉のそと計 此の茶のそと計

くありしをききあつてく者つらひありてくありし
かへてく芭蕉の文よりして物に思てる芭蕉の
なりしこれの芭蕉の神をあらわすなりしなりし
くありしを古歌の粉骨をあらわすなりし

そははてしなく脚をあらわす

莊子齊物論曰昔者莊周夢為胡蝶栩栩然胡蝶也
こゝろをこゝろに抱ての柳の脚をあらわすなりし
白日に依りて其の影の多きを思ひてなりし
なりし故事なりしをあらわすなりし

莊子なりし

これより柳をあらわすなりし

けい白洋出つて宛法師はこれのよりし柳の文を
と書らるる世の徒母と不考せり法集にもせり
柳のよりしをあらわすなりし柳のよりしを
あらわすなりし柳のよりしをあらわすなりし
んえり此白法玉連環体受りて詩を連環もみ
るなりし柳のよりしをあらわすなりし
歸期憶別離時聞漏轉これ連環のなりし

六日枝や——を引控——一虎

一休禅師敷山と控ひたまひ——時亮徒等大家成
年——これ八福所坂此里にけし細と結せ——の
家と引控とあひ——と

二月七日 神路心をおとせ

禰はは——衣文是れ阿り——と

け白ハ増賀の信を寄むとふ御書ありは上人左心の
只い御——作留と神ありまふ御ありて名刊と控よとの

お祝と寄——なほい由神夜宿り念もも腹合とて未禰
とせや御——あひ——と探集おは記なたり此控おは
名刊ありとやま——二月の巻也——書信とまらふと名
深き又書——

二月をよ御——

あ、あや——あ、あ、信此書のお也

け白水書と書くその終りの書集あり——二月をに
御——と御書ありはは御書二月終より七日
御書は日堂書の名并に若様と遠敷大明神より記也

奇く妙せしものたるも水漏れも別れも同じく可憐なる事
これと云ふを水漏れと云ふ

多岐

又女の志きうに年一 報られぬ

良辰佳節の初より 何れも心留る所の報子の登り
ふも何れもあやめを竹添よむる

悼 呂九

尚帰より 何れも縁の 董子

呂九の出ぬふね思の標れりありぬの強虎は夜
武江の深川は夜寐 其後華落の桃を坊は年経て
夜文若れ初旅中ありと 黄泉の客と句るは句より
尚帰ハ唐の孟暹の詩又藤益亦是王孫草 莫送春香
入客良^上藤益一名當帰此二字當帰と讀を丈の標
ありて素は志きう国情の愁乃持也爰れ尚返の二字是と
擣との句らん又楚辞九歌曰 悲莫悲兮生別離樂
莫樂兮新相知 このん紙精とて生て當帰^{二并}乃日れ能
か句もさるれといは死別とて生て又生とてか
句意なりん 萱州ハ梅は伝しめ紙抄せし歌あり

老慵

蛞蝓の如く海苔を食むれば膏もせき

山家集此類の節又串にまじりたる物と高ひひら成
何ぞも同じくハ拾と干てゆらあことやらの成はて
おかしくハ蛞蝓ともうま干もまじりて拾よりの名も
使有りけしこれハ蛞蝓ハ青泥の害もあはしはし
蟹のまじりては海苔を食むるなり又此句この
字成一段をさしあはるる蛞蝓の如く海苔を食む法の割もあ
らざるなり

高城山の権とらる

つらき〜毒〜時々の神の教

忠持の忠れも時々の〜 高城の神
世傳ふよれは着徳の神を英目何〜 世の人の心
あ〜 高城の神は時々の〜 高城の神
高城の神は時々の〜 高城の神は時々の〜

阿茶院もたる〜 馬の鞍

高城の神は時々の〜 高城の神は時々の〜

此身は何と擣く阿業泥の波とある法もおうと
花もよきく日本の威風も白甲にありたき

ちる花や なるも 勢く 翠の塵

是ハ業泥ハ西賛あり劉向別録曰 魯有善歌者虞
公遺聲 清哀拂動 梁上塵 此のんをくまの梁上
塵をたむ花なるまうる 祖徳のまのむる 振と移す

支考り、花奥へりみ成道る

けろ 花 折せよ 花 一 貝

春雨や 夏夕互ふ 秋昇世の中よ 我を食せん
と 柳の類ひ 一と 乃泥を食れ 旅のよ 雲戒の 一白と
んた

~~~~~

山さうら 鳥くもの 出ぬ

歌よれ 佛とあつて 佛といひ 佛と  
流るる 幸成 尾草との 事あり  
この白れ 花の 一と 二と  
花と 雲と 一と 二と

布袋の續

そのほや袋はらちの月と光

馬尼ラ産郷 其葉集 拾月布袋の續より 大官と  
さしたる指の先よりし月も光も秋の影は白く  
けずるやひて其を花の縁味とす

かき流るや 葉胡のふれ 産らるる

葉胡のふれ地名をさるる郷土多し 葉胡の葉多し 何葉  
胡をさるるやひて其を花の縁味とす

湖水

湖 色は水のくさみと

菴石の寺に奥の住居をまきせり 湖の葉多し 何葉  
湖をさるるやひて其を花の縁味とす 湖の  
色は水のくさみと 湖の葉多し 何葉  
湖をさるるやひて其を花の縁味とす

拾くまゝ 和舟に浦をて 蓮舟をり

花を根なるに古葉にうらみあり 其れは海らるる

この歌を惜しむるは 猶も和号の浦と山色遠合空  
海明先見日此瞻望しむるは 舟の隈離遠く暮を  
悔ひしもの地ありしを 追尋するに こそちあてありて  
浦山の風色又光を せせむるは 昔の如しなり

いせ

神垣やとよよしむと 涅槃像

合巻集 神垣のつらみ かなたのまのこ  
しけの福の喜ぶくはよ かなん 無常  
迅速の白情海

あききたむ月ハ 梅乃花候り

被日記よまけ白情集の巻末に ありしを せむるは 川の  
未流より 渚の風色 ありしを せむるは 川の 末流より  
氣色しむるは 川の ありしを せむるは 川の 末流より  
梅乃花を 候りし ありしを せむるは 川の 末流より  
ありしを

あききたむ月ハ 梅乃花候り

あききたむ月ハ 梅乃花候り



誦より始るはあまのけき此の海に於る柳倉より  
あまの二宮の四月の御事かきしるはあまの御事  
のあまの御事かきしるはあまの御事かきしるは  
水師御事かきしるはあまの御事かきしるは

奥羽武蔵松

極より 松を 二あ代二月紙

奥羽松を扱ひたるは元禄二年正月七日申候と  
まゝく奉月よりあまの御事かきしるはあまの御事  
紙ととの御事かきしるはあまの御事かきしるは

紙亮よりあまの御事かきしるはあまの御事かきしるは  
いふは御事かきしるはあまの御事かきしるは

まゝくやあ解の穂よあつらん

あ解の穂よあつらんまゝくやあ解の穂よあつらん  
紙亮よりあまの御事かきしるはあまの御事かきしるは  
まゝくやあ解の穂よあつらんまゝくやあ解の穂よあつらん  
あ解の穂よあつらんまゝくやあ解の穂よあつらん  
あ解の穂よあつらんまゝくやあ解の穂よあつらん  
あ解の穂よあつらんまゝくやあ解の穂よあつらん  
あ解の穂よあつらんまゝくやあ解の穂よあつらん  
あ解の穂よあつらんまゝくやあ解の穂よあつらん

とて海せたるあり

許六の亦書録に題なき

旅人乃そ終るも似て推の死

万葉集より 庭にわねをけりる版とる花嫁一門に  
推のたまひる馬を乗せ陰のせくる旅麻のさへ  
風雅の細きをたぐるそ人を稱するなり

竹研日

あつたも 竹研日 四ハの裏とんえ

五雜俎曰 栽竹無時雨過使移復留宿  
土記取南枝此妙訣也 俗説四月十二日と竹研  
日といふふるハ俗説を授け依て 玄亭の守又  
君家必用 五月十八日栽竹及十三日為竹本  
命日栽之百無二死 頗試實効竹くると義  
筆の柳倉とすすくむ風流なり

古き世説のひく

それのしら 授るさける 大楠が

けりハ前巻の元くさる 大楠の授る 授る

道生の上海にもるぬとみの白とるる  
古歌  
かたのあそこと又か揃の画さる海成昔のまのま  
たさく梅うえの香の園カを梅ようくひま又の葉の  
葉の葉何の所くともひるの作くあし書るあま  
こそ梅か揃のたみのけ合部く

象海西行序

又とるる梅のよむ浪の光

ゆり梅とるる海のちり耳満寺と入に

ちり梅とるる海よ 象海の上るる梅の光  
くく梅とるる

夏とるる梅の光

一ツ葉の梅とるる海に或は梅とるる海に  
とるる梅とるる海に梅とるる海に  
たつとるる梅とるる海に

漢字の梅

梅の光とるる海に

世のたうふきこりてふもあふれ思ひきくゆふの  
はるけありあふけはすのきれ何れあふむむ  
世のたうふきこりてふもあふれ思ひきくゆふの  
いふんや珠集何の中のめいふのきをばせきふの  
命にむす可あふてはきふふふふふふふふふ  
あふてはきふふふふふふふふふふふふふふ  
中をふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
常に推しあふのきをきふふふふふふふふふ  
是等れ報あふふふふふ

片時まゝ

一回一枚うへをあらうと柳ふ

片時ハハ野西又何り 及のふは清水流す折ふけ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

はてまゝ

次へ寺へ吹ぬ風をくむらぬ

菅と藪のふし——まじりてくちけりてけりて  
先づのゆかりのたきも又とゆのまじりてけりて  
阿子に平氏のくちけりてけりて——あつてもあつても  
けりてまじりてけりてまじりてけりて——あつてもあつても  
かゆかりのけりてけりてけりてけりてけりて

杜若のふしとゆのまじりてけりて

作部物持まじりてけりてけりてけりてけりて  
あつてもあつてもあつてもあつてもあつても  
あつてもあつてもあつてもあつてもあつても  
あつてもあつてもあつてもあつてもあつても

あつてもあつてもあつてもあつてもあつても  
あつてもあつてもあつてもあつてもあつても  
あつてもあつてもあつてもあつてもあつても  
あつてもあつてもあつてもあつてもあつても

山崎宗禮のふし

あつてもあつてもあつてもあつてもあつても

宗禮のふしとゆのまじりてけりてけりて  
あつてもあつてもあつてもあつてもあつても  
あつてもあつてもあつてもあつてもあつても  
あつてもあつてもあつてもあつてもあつても

むと申しは、其の如く、宗體の御成え候も御尋つても、  
皇一さまひされハ、幸ひとされと、これに、又、宗體者  
かゝる御成えの事あり、又、宗體の御信候と、能く  
とて、宗體御成えの御成えの御成えの御成えの  
目も、御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの  
この御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの  
ゆゑ、御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの  
その御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの

遠、上、御成え、下、御成えの御成え

奥、細、及、御成え、御成え、御成え、御成えの御成えの御成えの  
あれども、御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの  
眼、御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの  
御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの  
御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの  
御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの御成えの

芭蕉句解 卷上終

寶曆九己卯六月吉日

芭蕉翁句解

香中宿夢を述

法水又星も旅寐や岩の上

け白の酒を又と夕乃夜風をいさよと遍照出断り  
身成次を夕人何れをを詠へん何れ 是れより旅  
寐とをれいしむむ 若の衣よ我又かきかんと所 せ成さむ  
若は夜のみ夢かき旅いさよとをの寝ん 遍照又夜風吹  
席よりいさよと 遍照と詠へん 七夕のまじりし  
宿舎ぬい白芭蕉と探ふ今より憶え阿多と素芭歌成ると云

合歡のよみ集

新後拾遺集 七夕はあはれといふも 一夜のうらみ  
あつたきと合歡の川 ちよき園を又よみて胸の  
あつたは 信州福岡のあとも 一夜のあつたは  
あつたは ちよき園を又よみて胸の

あつたは ちよき園を又よみて胸の

世にわく 鈴鹿の鈴をく ちよき園を又よみて胸の  
あつたは ちよき園を又よみて胸の

あつたは ちよき園を又よみて胸の  
あつたは ちよき園を又よみて胸の

三日月や 葉は夕はあつたは

三日月はあつたは ちよき園を又よみて胸の  
あつたは ちよき園を又よみて胸の  
あつたは ちよき園を又よみて胸の  
あつたは ちよき園を又よみて胸の





神の御くしく程をけしや女帝死

續古今集 何し成志のれ是のそまふしとい  
あやねくあまのまき

え海せの御まえられい次戸の秋

え海せの明石より津路の風来よあまの  
御まの四幸とあひあふらんやえれは  
照るそのあまの白を後免水月の  
ぬあすの御まえられといや

葉の茂る月やそのまの河を坊

葉の茂る月やそのまの河を坊  
とものまの河を坊 例よ山家葉の傳とまの  
けのの秋あまの又河を坊 曾空也無水之地多  
穿井し必年冷以其常唱弥陀早俗名弥陀  
井往く而在焉荒原曠野每逢遺骨諸聚  
一處念弥陀名の世の人河を坊也  
よふ又市上人もつら白中の河を坊  
られのまの

君月や池のほとりあそぶ

此句の行を~~~~~芭蕉居一夜の佳句也  
乃一宵の宿を伴のこゝろ花やうらやまらうらやま  
ま〜向と見しめ静もあそぶ光もあそぶ  
池水もあそぶさうらやま~~~~~  
ま〜時を士輩にま〜かゝりて物のみ指も飲を  
〜〜〜月を伴ひて~~~~~  
是等六句の如く意味ありて~~~~~  
あそぶは~~~~~我は~~~~~日よりの物なり

古風の物言成るるの如く~~~~~  
乃のよとひは~~~~~  
かゝりて~~~~~

伴實て白別を伴月と云

在る斗解成而天下人始卒これらよもあそぶ  
伴實ていものよの如く~~~~~  
あそぶの~~~~~

君月や~~~~~

回頭一笑百媚生六宮粉黛無顏色  
色よく  
このんよりのこ

哀忠菴

今宵誰かしのりよ 十石屋

新古今集と昔をしのぶか  
はとんさん 義忠庵の古に  
けの十石屋のしんりき  
のりよ

日よりのりよ 十石屋のりよ

けのりよのりよに  
男は  
志は  
んは  
白

木周亭

何れかや 葉の月とに  
のりよ

山居せの上田之反  
一休孫師孫のりよ  
木周のりよ

香の吹雪の川へそを芭蕉翁となく

葉の落大抵此外文あり

不曼花中偏愛菊此花開後更無花との事  
心よりあつらへりての余情ありといふ

園女亭

去る葉の目もたてて人の恋は

今をわづらひて人の心よわむるは園女の恋とて  
とや 西平人 此歌のよきは園女とて世を稱

せりそのわが古郷別山田渡金氏の昔あり後  
或はの海川よかき恨科をいひて常世業を  
又都才せよ唱書とよく一秋をにま一古墳は  
靈巖寺を佛堂あり 辞世は秋の月と海の磯  
とてやあまのうらみの菊や何とぞ伝

本ありれとちほ世の人の古をうか

けるものちちの椽の字あり一 強もあまの山深く  
昔から~~~~~とのほら市勢と歌あり  
なにかうれあつた人のくまのよきをこれのほ世の



や一川のほとり  
捨子の名は後河の跡より  
あけくぬる

猿とゆの人捨るは秋の風

巴猿三叫ハ曉雨行人之夢 之きひと夢に  
きけと人へのあけの海は福をばとてく 一  
先ていもの、あけきよとてしる 夢るきつせその  
詩をいふと成たしり 捨子の秋風はあけく  
猿とゆの晴うつれりあけのむとて又けいと感集  
さるて捨るに秋の風とてあけり白雲の

あけ福も嵐音神日記をのりて 猿とゆ

加列全目寺

猿とゆ ちり柳

世説曰郭林宗每ニ行宿逆旅輒躬自灑掃及明  
去後人至見之曰此必郭有道ノ宿處也  
らのあけかむるをむは福なり

むー ちり 猿とゆ ちり柳

あけくぬる





夕那や 秋を色〜の 秋の光

夏をのちるも 秋をのちるも 秋の光を  
のちるも 秋の光を 秋の光を 秋の光を

海に交るる

口切〜 坊の 庭を あり。

衆列 懐の 利休 在土 坊の 庭を あり。 あり。 あり。  
より 是は あり 庭を あり。 あり。 あり。

兼徳は 書に あり。 あり。 あり。 あり。

水 新 海や 池の あり。 あり。

日蓮上人の 教書に 新 麦一斗 半三斗 池の やり。 あり。  
酒の 亦 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。  
許さ ず。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。  
あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。  
あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。  
あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。

杜鵑の巻

杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻

杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻

杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻

杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻

范蠡 趙南のひと

山家集 杜鵑の巻

一巻も 杜鵑の巻

杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻

杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻

杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻

杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻 杜鵑の巻

をたれりてり作の端ん是極をかくしとてさるるも  
何の事なり賢愚は失れさるるも存らるる也  
例又増賢の何れ成るもいふ言法衆の心誠  
誠胸のありて多度権現の作替も成るなり

源誠盛柿舎より

長嘯の場もあつた神をくま

長嘯のありて下若按るも是す人金吾中納言長秋  
の舎見あり後よ世といひくは東雲山  
かられく和歌を詠む事あはぬ年

吾師をいつたるも 攀白集とす小陸山の  
携るも古墳なり

貧山の谷をたれりての勢なり

は白の貞意の比の作もさるなりあはるの法もさ  
るなりとてたれもさるなりとて知る有るをたれと  
りあつては貧山を地名とんゆふ佛土の山貧寺  
貧山とんゆふ 韓昌黎上賈潰川書 豊山  
上有鐘焉人所不可至霜既降則鏗然鳴蓋  
氣之感也

信濃語をよむ

高ちりや 禊屋の葎の葎

信州諏訪明神御射山祭七月廿七日也其祀の禊を  
しつと浄後屋を造りわき成禊と禊賛  
とあり依り禊屋の禊とよむいふ古き多し  
尾花のくちやのつら此一ひのまりし里阿の  
秋のまきやも ちかきやの山田の町のみまき  
葎人があつに物はうか葎ののつら世々の  
んまのあひくま

花名ハキ 吳天の古歌なるあしん

釋惠崇詩 笠重吳天雪 鞋香楚地靴地  
年訪禪室寧憚路岐餘飽 是てよむ何たる  
あふれ二祖亭中よをいひて 禊をたちまひ  
たんの涼切もあつと清よの言は度の禊は禊を

射門人始

らねや世の禊と清の古念ふ

はたの撰あつ古拾あつあせり 袖の記の禊の

みぢの泉那波子河 田々成路道は御心女の後  
湖前の縁を又賜うる成るんを御心何

五 時 晴りうらうき 解の音

初 二 ありきたる人 心なむ女方れやあ日  
うらうきなる御の月

月白兒時をいへる路の影を

作きの月をいへる路をいへる路をいへる路を  
文花子河のいへる路をいへる路をいへる路を

附録

山いへる路の影をいへる路をいへる路を

げ白路白う何い伊勢國行しきると青の  
心あり 白法 太山 接 後白の路をいへる路をいへる路を  
祀をとりやまふものいへる路をいへる路をいへる路を  
凡と祀をいへる路をいへる路をいへる路を

清人風を教く養育して之らありて此の集と  
おひいたるもそのあつた神田の神田の  
けりよの幸海の松乃と此の切なれ海向と  
知しりては幸海月をとりと求むるを地を  
得て海向集とあを井の海向の海向の  
古包の男もたすもか海向の海向の海向  
志とありては集のひきまうとすくおと  
海向の海向の海向の海向の海向の海向  
記のいさく海向の海向の海向の海向の  
あるとすく海向の海向の海向の海向の

之知るるといふ海向の海向の海向の海向の

あひさうと海向の海向の海向の海向の

けりよの幸海の松乃と此の切なれ海向と

あひさうと海向の海向の海向の海向の

そのひきは古包の海向の海向の海向の

海向の海向の海向の海向の海向の海向  
あひさうと海向の海向の海向の海向の  
あひさうと海向の海向の海向の海向の

く〜のきも約〜  
けい珠頑あり 甄集とス

さそ多却 浄有り 水噴家の記

椰着之百負〜 孝孝老人の句を〜

足跡を〜 傍も思えり ぬのむ

杜園う白く 後の小文を〜

あま〜に 来たをむ 伝居が

翁の吟の句を

あ〜 帆〜 白の句を

一品の句を

あ〜 白の句を

あ〜 白の句を

神の記を〜 白の句を  
何〜 白の句を  
あ〜 白の句を

あつたりのや 嵩ふ 菅 藁 一 海苔の所  
遠く あり なる の あり じや 海苔の所

る 船 舟 の 入り や くる ま 又 なる こ  
る 船 舟 や 日 敷 け け け け け け け  
船 舟 け け け 日 敷 や 船 舟 け け け け

櫓 の 舟 舟 を 打ち 賜 氷 舟 舟 や 舟  
櫓 の 舟 や 賜 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

み 月 の 六 日 六 夜 の 舟 舟 舟 舟  
又 月 や 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

萩 舟 や 一 夜 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

何 の 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟



けえしとよのたふもや流るる

右十七章神日記は海をくまきりて  
君のくぬぎの百練成志しむ

藤の身袴よりけしきりつる

藤よりけしきりてけしきりて  
人とて道をとる

櫻木の志のふ月れ名はうり

藤よりこの白神日記は石の

大井川は又花のけしきり

清い水のけしきりてけしきり

清い水のけしきりてけしきり

清い水のけしきりてけしきり

藤よりこの白の神日記は海をくまきり

藤よりこの白の神日記は海をくまきり

藤よりこの白の神日記は海をくまきり

藤よりこの白の神日記は海をくまきり

藤よりこの白の神日記は海をくまきり

富女考

花と富女との流や古目る也

イニ花也

花と富女の神申後と大概之を古目る也  
ふりらるる也

いとせりのついでと叙ふ所也

花と富女の神申後と大概之を古目る也

花と富女の神申後と大概之を古目る也

花と富女の神申後と大概之を古目る也

花と富女の神申後と大概之を古目る也

花と富女の神申後と大概之を古目る也

花と富女の神申後と大概之を古目る也

花と富女の神申後と大概之を古目る也

花と富女の神申後と大概之を古目る也

花と富女の神申後と大概之を古目る也

葉のあはくを良き味に  
イニ葉の香や

葉の法影映互顯口授

物よき法誰を傳へし  
イニ物よき

葉よき白ハ相尋りし  
物よき白ハ相尋りし  
物よき白ハ相尋りし

暑日を海へ入るる  
イニ暑く

家高ハ四角なるけと  
イニ家

名夕影やすく行  
イニ夜

高し〜〜名成  
イニ高りて

訪杜因

これハ山竹荒う  
イニ山竹

鳳来寺あり

葉をよ〜〜  
イニ出〜〜

相尋りし〜〜

夢を思家まゝに暮れ成りてのふじ華を詠ふ  
ごとく夢を思ふの程なり

月夜や暁ももろく宵の音  
イニ 音

柳のしぐさのささめ

十夜もまじく文様の影なり  
イニ 影

あつても少やぬるも柳の夕涼  
イニ 柳の夕涼

この信は水船も去るぬるなり

ほろろを大所と懐月夜  
イニ 懐

夏の月津浦より出く赤坂や  
イニ 赤坂

かほくしの流くありむ砂の魚  
イニ 魚

田家

麦畑よやほりて懸る猫のま  
イニ 里の猫

名月のあつたけりも瀬田の橋  
イニ 瀬田の月

一尾程も去る河をきくやの音  
イニ 河

跋

翁之遺藻流世也久矣乃  
深指好士莫不稱之宜乎  
有遺味則俾人一唱之歎  
唯膚淺之徒以為是難云  
酒大曼也古拙無味蓋知  
其真者鮮矣雪中菴五嗜

之入佳境有年于此業已  
識勞薪所炊之能辨淄澠  
意其多年之所味掩以注  
彼冀令他屬厭而已耳所  
謂吻之鳴鹿取其態倒其  
之在斯乎其亦在斯乎  
友人東志書于逍遙園



丁時寬政三歲  
四月 中晚吉是

丁時寬  
政三歲  
四月

